

古文 品詞分解（動詞・助動詞） 「十訓抄 大江山」 問題

和泉式部、保昌が妻にて、丹後に^①下^アけるほどに、京に歌合^②あり^イけるを、小式部内侍、歌詠みに^③と^ラうれて、歌を^④詠^ミみけるに、定頼の中納言^⑤たはぶれて、小式部内侍^⑥あり
オけるに、「丹後へ^⑦遣はし^カける人は^⑧参^キりたりや。いかに心もとなく^⑨思^スく^ラむ。」と^⑩言ひ
て、局の前を^⑪過^ゲぎ^レられ^コけるを、御簾より半らばかり^⑫出^デて、わづかに直衣の袖を^⑬控^ヘて、

大江山いくの道の遠ければまだふみも^⑭見^サず天の橋立

と^⑮詠^ミかけ^シけり。思はずに、あさましくて、「こはいかに、^⑯か^カかるやうやは^⑰ある。」と
ばかり^⑱言^ヒて、返歌にも^⑲及^スば^ズ、袖を^⑳引^キき放ちて、^㉑逃^ゲせられ^ソけり。小式部、

これより、歌詠みの世におぼえ^㉒出^デて来^タに^チけり。

これは^㉓うちまかせて理運のこと^ツなれども、かの卿の心には、これほどの歌、ただいま

^㉔詠^ミみ出^ダす^テべしとは、^㉕知^ラれ^トナざり^ニけるにや。

古文 品詞分解（動詞・助動詞） 「十訓抄 大江山」 解答

和泉式部、保昌が妻にて、丹後に^①下^アりけるほどに、京に歌合^②あり^イけるを、小式部内侍、

ラ四⑥ 受身

マ四⑥ 過去

ラ変⑥ 過去

ラ変⑥

歌詠みに^③とら^レれて、歌を^④詠^エみけるに、定頼の中納言^⑤たはぶれて、小式部内侍^⑥あり

過去

サ四⑥ 過去

ラ四⑥ 完了

サ四⑥ 現在推量

ラ下二⑥

オけるに、「丹後へ^⑦遣はし^カける人は^⑧参^キりたりや。いかに心もとなく^⑨思^スくらむ。」と^⑩言^ハひ

ガ上二⑥ 尊敬

過去

ダ下二⑥

ハ下二⑥

て、局の前を^⑪過^ケぎられ^コけるを、御簾より半らばかり^⑫出^デて、わづかに直衣の袖を^⑬控^コへて、

マ上二⑥ 打消

大江山いくのの道の遠ければまだふみも^⑭見^サず天の橋立

カ下二⑥

過去

ラ変⑥

ラ変⑥

と^⑮詠みかけ^シけり。思はずに、あさましくて、「こはいかに、^⑯か^カかるやうやは^⑰ある。」と

ハ四⑥

バ四⑥ 打消

タ四⑥

ガ下二⑥ 尊敬

過去

ばかり^⑱言^ハひて、返歌にも^⑲及^スばず、袖を^⑳引^キき放ちて、^㉑逃^ゲげられ^レけり。小式部、

カ変⑥

完了 過去

これより、歌詠みの世におぼえ^㉒出^デで来^タに^チけり。

サ下二⑥

断定

これは^㉓うちまかせて理運のことッなれども、かの卿の心には、これほどの歌、ただいま

サ四⑥ 終

可能

ラ四⑥ 尊敬

打消 過去

詠み出だす^㉔べしとは、^㉕知^チら^トれ^ナざり^ニけるにや。